



山行報告

■白峰三山（北岳 3193m・間ノ岳・農鳥岳）

●日 程：9月23日(土・祝)～27日(水)

●参加者：L 島谷 SL 安田 笹木 高島 春本

●行動記録：

(23日)：東梅田夜行バス 22:00 発～

(24日)：甲府駅(6:52 着)9:05 発～広河原バス停(10:58 着)11:30 発～
白根御池小屋(14:35 着)泊

(25日)：小屋 6:15 発～北岳肩ノ小屋(10:10 着)10:45 発～北岳(11:50 着)12:20 発
～北岳山荘(14:00 着)泊

(26日)：小屋 4:20 発～間ノ岳(7:10 着)7:30 発～農鳥避難小屋(8:45 着)9:10 発～
西農鳥岳(10:15 着)～農鳥岳(11:15 着)11:40 発～大門沢下降点(12:20 着)
12:30 発～大門沢小屋(15:45 着)泊

(27日)：小屋 6:30 発～大門沢登山口(9:30 着)9:45 発～奈良田バス停(10:45 着)
13:50 発～JR 下部温泉駅(14:59 着)～姫路(19:33 着)

◆息をのむ絶景！ 日本一の稜線、尾根歩き

春本泰典

日本第2、第3の高峰北岳間ノ岳と、農鳥岳を白峰三山と呼ぶ。自分は『知らねえ』だったが島谷様の企画から始まり、ここ数か月で自分の山日記史上、この上ない紀行で魅了されることとなった。何もかもが初めてで、初日集合の阪神百貨店東口で迷い、夜行バス乗り場をさがしたところから始まる。最近の夜行バスの快適さ、大阪より京都乗車が多く夜明けの諏訪から山梨へ行く車中前方に観える富士山、朝7時前甲府駅に到着。(移動初日 歩数 11,003 歩)朝食利用のカフェで、山の格好を見た地元男性にどこへ行かれるかたずねられ「きただけ」と一言返答。「へえー北岳かあ」と、よかったあ『来ただけ』ととられてなくて。駅から広河原へのアクセスで、定期バス臨時便ありを利用。車掌さんのレトロな前バック、走行中のガイドが気を引く。まず甲府から見える富士と甲斐駒の迫力。東に地元の案内でしかない偽(にせ)八ヶ岳が甲府にあると聞く。なるほど本物はそのバックに大きく見えるのだがそっくりだ。小さい富士もあると言っていたので定員乗客はきょろきょろ。進行方向の山塊に鳳凰三山の案内、オベリスクを聞く。夜叉神峠を越えるとカーブの連続。毎日のことなのか、運転手と細身の女性車掌はお見事、横向きシルバーシートに座ると車酔い注意。今日の見晴らしはまれだと強調するお二方、これだけ楽しませてくれて普通運賃はお値打ちだ。

バスの終点広河原から(1527m)白根御池小屋まで(2233m)が今日の行程。11:30頃から14:40まで休憩22分で登ります。この山行前の夏山でねん挫した右足首が、膝にまで痛みがきて1か月の間に中低山行2回と土トレ2回を動かさなければと参加して、普段以上に慎重すぎる歩き方で挑んだのでそれ程苦も無かったが、途中ザックのポケットに差し違えたテルモス

を無くしたと早とちりして 10 分の休憩時間で駆け降りた時にリーダーに心配させたのは反省でした。白根御池小屋は南アルプス市の認定小屋で、新しくきれいで清潔感ありトイレ洗面が 2 階にも在り、すべての対応が快適でした。1 分もすれば一周できる池があり、見晴らしのいい岩では野呂川をはさみ対岸の鳳凰三山が観えた。このあたりの植生は時季外れで花々が枯れた後で、木々は森林限界手前の様。見上げると北岳の頂らしきものが見えた、そこに続く道はかなりの急登です。北岳は見る方向でバットレスとか八本歯のコルでやや特徴があるが、高い以外は区別できない。明日はあの頂までまだ千メートル登らないと行けない。(2 日目 9,680 歩)

6:18 抜けるような晴天、風なく冷え込み弱く小屋で弁当を作って出発、尾根までの 120 分間の急登だ、リーダー自分 S さん T さん Y さんの順で、ストックつく注意をご教授ゆっくり息使いやらを気を付けながら歩く。休憩ではパンの袋がパンパンになってる気圧のせい湯の入れすぎかジップロックがはじけて α 米の汁がこぼれている、Y さんがポリ袋をくださった。信頼できて頼れるお姉さま方達です。気圧で自分達の肺も膨らみ過呼吸なのか少し苦しい。草すべりコースはなるほど萱に似た細身の植物がグラススキーみたいになっている。滑落すれば止めようがない。ある意味怖い急斜面をつづら折りで標高を稼ぐ。食害ネットが張ってあるところで森林限界なのか高山植物保護なのかゆっくり観察する余裕がない。息を整えようと振り向いたら鳳凰三山の地蔵岳頂上のオベリスクが見えてきた。燕岳のイルカ岩に似た柱上のシンボル岩が良く見える、これ上高地でも有名なウェストン卿が関わっているらしい。いよいよ小太郎尾根分岐迄上がってきた、木々はハイ松だけで岩がメインの登山道尾根だ。周りの景色を一望できる。正面に南アルプスの女王大きな仙丈ヶ岳、その右手に貴公子甲斐駒ヶ岳が白い岩が特徴的だ。ともに間近で観ることができ感動した。その先に八ヶ岳連峰赤岳も観える(偽物だろうという意見もあったが後で本物とわかる) コース先はもちろん北岳なのだが肩の小屋が見えないのでまだ先でしょう。さてさてここからは日本一高い稜線の始まりでわくわくする。アレっ足の痛いイタイのとんでいったあ。少し歩くと今度は富士山と北アルプスの槍がはっきりと目に飛び込んでくる、なんという絶景だ、写真で見るとは大違いまさにパノラマの中に見えるみたい。北岳肩の小屋で昼食をした、ここまで来たのですぐ先に山頂もそこです。

11:50 北岳登頂!ぐるりと見渡すと新潟の山から福井の山まで 100 名山の 50 座くらい見渡せるというのは本当だ、槍、木曾駒、乗鞍、御岳、南アルプスの山々が目線の下に見えて、富士も等身大かここでしか見れない高さから拝めた。さほど広くはない山頂で、大きな岩がゴロゴロあって山頂を示す標板のみです。前記の百名山のような祠も無く信仰の山ではないのかとてもシンプルだ。ここで長めの休憩したら、間ノ岳方向からわらじを履いた二人の男性が登頂した。仙丈ヶ岳から両俣を超えてきたと言う強者で素足に自作のわらじだと言う。あの岩や崖で足指どうもないか聞くと、日本古来の履物の良さは現在の靴より優れているという。日本人はなぜ靴に履き替えたのかとか、歩みを極めた御人でしか言えないせりふだった。充分な休憩だったが名残惜しく下りのコースへ、あれが 8 本歯のコルかバットレスとか指差しながら北岳山荘へ。14:20 着 だがこの 14 時がくせもので小屋直前にしてメンバーがスリップしたが、へ



ヘルメット着用が救われた。大型の山荘で扉や窓は最小限で要塞か装甲車みたいな外見だ。㊦ホイホイにも見える。富士山の見えるベンチで若い女性がジョッキでビール、うまそー。自分は本日の絶景に酔ってますよー。夜にかけての富士の色の变化、星空はベストスポットだ。

(3日目 13,319歩)

風ややありの夜明け前、アウターシェル着用でご来光に合わせて中白根山へGo。一時間で登頂と同時に、太陽が鳳凰三山と富士の間にベストタイミング。横視線は青空なのに頭上は雲、北岳にも雲がかかってきた。だがだんだん薄くなりガスになり消えていく。滝雲の様なものも確認できた。今日も期待できる山日和なんじゃない。歩きやすい稜線で間ノ岳に着いたのが7時すぎ、ここでも北アルプスがよく見えたのだが奥穂高がどれだか解らず、その代わり塩見岳をはじめ南アルプスの山々が良く見えだした。間ノ岳は北岳と3mしか違わないで奥穂と同率3位なのです。ここ南アルプスは火山ではなく昔海だった地形が隆起して出来たものと言われ、間ノ岳も1年に4mmづつ高く成長しているそうなのでいずれ単独3位になるのではと思う。確かに家にあった古い50年前の地図で調べたら北岳の標高が3192m、間ノ岳が3189mと現在よりも-1mの表示でした。次のコースへ進む、3000mの登り返しは5~6回ある。相当降りたコルに農鳥小屋が見える。この稜線は山梨静岡県境で唯一北岳だけがどっぷり山梨県内。農鳥岳富士山は静岡県と分ける。ほかに甲斐駒ヶ岳は長野県と分け、南アルプスの塩見赤石聖は長野静岡県境だ。なので間ノ岳から尾根は県を跨ぎまたぎ歩くことになる。直下にある農鳥小屋まで見ればすぐその様だがこの辺り岩が大きくて1時間余りかかった。小屋は営業を渦中から終了していて、無人の避難小屋になっていた。時刻は8時半、この先の小屋までは7時間以上かかるので北岳山荘の弁当とトイレを借りることとなる、つぶれた家屋もあり、便所入り口の梁で頭を強打。ヘルメット着用で難を逃れた。先のピークを見上げると3~4人の



パーティがみえた、間ノ岳までは人並みあったがここからは若いテン泊の男性一人だけ、こちらが出発の時食事を始めていた。さっきのピークは未だまだ西農鳥岳までも遠く、登り返し一時間余りの行程で容易に着かない。すれ違いの男性に聞くとはるか遠くの尾根が農鳥だと言う。このアップダウンが背丈以上の岩のルートで、前から下りて来た二人と鉢合わせた時、マークの道を譲ってすぐ横の岩に取り付いたら三点確保どころか顎を付けた五点支持でしがみつき動けず、命の危険を感じた。思い切ってクライミングの如く片手に預けた岩で難をのり越えれた。とりつき印を外すと踏ん張れないと「あ〜！」だったろう。ヘルメットの顎ヒモも普段煩わしいがここで役立った。西農鳥を超え農鳥岳迄は結構長く、間ノ岳から農鳥岳まで4時間半以上かかった。下り稜線だと想定した以上の最大の難所だった。農鳥山頂は塩見岳からそれに続く南

アルプスが間近に見え、富士もオベリスクの鳳凰三山甲斐駒も見え、北岳は頂に雲がかかって

高さを感じた。名残惜しや極楽浄土の稜線尾根歩きは終盤なり、四方の山々が見渡せる南アルプス、それがちんけな山ではなく一級の本山ばかり、そんな処はそうない。今度はあの山から見たいとか登りたいとか疲れていても山登り欲が出ます。ここからは稜線だが眺めは減って植生も減って、岩ばかりで遠目で銀色に光ったハイ松の枯れ枝の下り尾根です。大門沢下降点の標識で休憩中奈良田から登ってきた若い女性1人、この時間から北岳山荘へ向かうそうだ。私たちが6時間かかった道を行くとなるととても心配だ。若いと多少のことは無理出来ても……。大門沢小屋まで200分高低差1000m以上の激下り、ワンストックでロープ有の急坂を下り木々が増えてきて遠景が見えなくなるころ、白っぽい石に雨粒の様なもの。ここへきて初めての雨だ、しかし衣服は木々のお陰かそう濡れることなく山小屋に着く頃は乾いたままだった。思いのほか足にきたようで、小屋の2階へ上がる丸木階段やトイレの急坂は辛かった。ここ大門沢小屋はネオクラシカルで、飲み水はかけ流しで外トイレに続く道が水浸し、小屋サンダルだと靴下ベチョベチョ。男性朝顔丸見え、板子1枚に切り込みのpottonで昔で言う‘厠‘(かわや)だった。寝所も天井の無い納屋で屋根の梁には角材が横たわり、自分の肩に子供の手の大きさ位の蜘蛛がポトリ。沢のザーザー音と共に一夜が過ぎる。11時間歩き続けたのだ、ストックを使って四足獣の様な体勢でしたのでぐっすり眠てしまう。(4日目24,398歩)

最終日も晴れていてくれた、小屋で朝食をとり6:30出発。奈良田迄900m下降。距離が一番長く4時間以上の行程。リンドウやトリカブトの花、ブナ林を巨岩あり沢渡りあり吊り橋あり丸木橋ありのさほど急坂ではないが、脚の疲労が蓄積しているところで気を抜けない時間が経つ。無事奈良田バス停10:40着(最終日21,268歩)

振り返ってみると、計画をリーダーから聞いて事前トレはメンバーと一緒に出来なかったけれど、自分なりに痛めた脚が元でリスク回避の為の準備が出来たんじゃないかと。仮に体調が万全だと調子に乗ったり油断したり、慎重さに欠けたんじゃないかと。どれもこれも天候、計画、メンバーの絆が少しでも悪ければ違った結果になっていたのではないかと。想定ギャップからこの好結果はひとしおで何よりです。

■ 檜ヶ峰Ⅲ

●日 程：10月15日(日)

●参加者：L藤本 SL野村 小田 坂本 田羅間 春本 松本(聡) 吉村

●行動記録：阪急宝塚9:20発～妙法寺登山口(9:45着)9:50発～岩倉山(11:20着)11:45発～エデンの園(12:20着)～檜ヶ峰(13:10着)～六甲保養荘(13:40着)13:50発～甲山(14:50着)15:10発～神呪寺(15:20着)15:25発～阪急甲陽園(16:00着)

◆ 都心近郊に珍生物発見 !?

春本泰典

今回の檜ヶ峰Ⅲは、前回の2回での逆瀬川駅からなく宝塚駅ゆめ広場で集合して甲陽園駅までの行程です。

六甲縦走コースの逆走コースも含まれます、塩尾寺方向へ向かいますが長寿ガ丘あたりから舗装路でも中々の急登りです。

譲葉山へ向かうのに山を見上げると、中腹に灯台のような塔が見え隠れする。登山道が妙法寺となっているので仏舎利塔のある無人の寺で宝塚を一望できる展望地でした。

とっかかりのコース取りからリーダーのセンスの良さを感じた。

岩倉山、譲葉山と全縦道を含めて登るがマイナーな感じの登山道でした。高圧線下とか鉄塔辺りだけ整備がしてあり、踏み跡の少なそうな急登を越えました。

本日ピークの 514mを踏んで、次のお馴染みエデンの園へ急降下します。次の檜ヶ峰の登りはリーダー他メンバーが既に通っているのに何か違っていているようなコースで、ここも地元の踏み跡らしくなく荒れていた。

藪漕ぎしながら小さな標板の檜ヶ峰に着いたが、長くは滞在せずはたまた急坂降りて六甲保養荘へたどり着きトイレを含めた休憩をとります。ここでの金木犀は甘い香りの癒しになり暑さで火照った身体をクールダウン。

次の目的の甲山までけて平坦ではない一般道で向かいます。前回 2 回の檜ヶ峰で観えていた甲山の山塊をやっとこさ登れるのかとワクワクしてくる。

登り 100m程だが高い階段状で、ぼちぼち疲れた脚に堪えてくる。兜の形というよりお椀を伏せたような地形で頂上は広く平らでした。ここで休憩をとった事もあり高低の標高図で見ると唯一の横ばいになっている。

何気に観た植生に、なめらかなキウイフルーツ形状の果実を見つけた。誰も解析できなかったが後でカラス瓜かんろうじの一種ではないかと結論づけた。

下山途中の神呪寺からは大阪方面が一望でき、人も集まっていた。

阪急甲陽園駅までは急な下りの閑静な住宅街で、あまりに急で足がよたよたしてくる。

駅前の花壇でハチドリが花の蜜を吸っていると、メンバーは写真を撮っていた。リーダーの調べで、ホシホウジャク（スズメ蛾の仲間）だったとき。



♪ 金木犀の香り誘われて 歩みはきつく膝にくる ^ ~



■月遅れのお月見の宴

●日 程：10月29日(日)～30日(月)

●参加者：L佐々木 SL上田 阿部 一瀬 岡田(淳) 黒本 中村 春本 平石 松岡

●行動記録：

(29日)：朝来 SA9:15 発～冒険館(9:55 着)11:30 発～阿瀬(11:45 着)昼食 13:50 発～
上山高原(15:45 着)

(30日)：上山高原 7:05 発～上山山頂(7:15 着)7:35 発～上山高原(7:45 着)8:10 発～
河合谷登山口(8:20 着)8:35 発～大ズッコ(9:55 通過)～扇ノ山(10:30 着)昼食
11:35 発～登山口(13:05 着)13:30 発～薬師湯(14:15 着)15:20 発・解散

◆月遅れのお月見の宴 扇ノ山

松岡雅美

テント泊！高原でお月見！こんな機会は今ななさそうなので行ってみたいと思い、申し込みしました。しかし、なんと希望者が多く、あみだくじとなりました。約1/2の確率で当たり！喜ぶ間もなく、リーダーからの寒さ対策や熊情報が入ります。熊被害はTVでも毎日のように報道されていたので不安が募ります。初めての本格的な防寒着やシュラフなど、荷物いっぱいに出発。小雨と晴れを繰り返しながら、秋の但馬路へ向かいます。まずは、植村直己冒険館を見学。深いクレパスをイメージした、切り込んだ細い入口は圧巻です。世界を駆け巡った冒険家の足跡を再認識し、極寒の生活の中で工夫された様々な展示物や人々との交流から、偉業を成し遂げた植村氏の偉大さを以前より深く学ぶことができました。昼食は、阿瀬渓谷にある雰囲気のある囲炉裏のあるお店。目の前で焼くやまめと多くの山菜料理を堪能しました。その後買い出しをし、いよいよ上山高原へ出発。

1時間半ほどのドライブ。長い山道を上がり高原に近づいてくると一面に白く輝くススキが出迎えてくれました。キャンプ場はなだらかな台地が広がっていて、遠く日本海が見えます。ここまで来るとかなり肌寒く、しっかり着込んで夕食の準備にとりかかります。ちょっとしたトラブルがあり、今回は全員避難小屋泊となりました。みんな手際よく準備し、各種飲み物・炊き込みご飯・肉・漬物・枝豆・おつまみ・おやつなどでテーブルの上はいっぱい。焼肉の匂いで熊が近づいて来そうと心配しながらも皆のお箸は止まりません。だいぶ日が落ち、雲もいい感じに広がり、ゆっく



りと月の光が雲を照らしはじめると期待がふくらみます。満月が姿を現した時は樹々とススキのシルエットも薄明りに浮かびあがりなんとも幻想的な雰囲気に包まれました。雲の流れで月が出たり隠れたりするのも趣があり、暫く楽しみました。大満足のお月見でした。明朝5時頃に「月も星もきれいに見えるで！」の声で外に出てみると、キーンとした空気の中、白みかけた夜明けです。暫くすると東に太陽・西に月と一緒にいる空を見ることができました。

2日目、いい天気恵まれ扇ノ山への山歩き。短い急登を抜けると木の階段道や木道があり歩きやすくなっていました。進んでいくと見事な黄葉のブナ林が広がっています。まっすぐな幹や変形してまだらな幹もあり変化も楽しめました。だんだん乾いてきた落ち葉をザックザックと踏みながら歩くのもとても楽しかったです。小ズッコ・大ズッコという所がありネーミン

グの由来が気になりましたが不明でした。みんなでワイワイ勝手な想像をしながら楽しく下山。ダイナミックに広がった紅葉・黄葉の扇ノ山を堪能できました。下山後、湯村温泉の薬師湯に入りほっこり、無事終了できたことに感謝。紅葉・ススキ・満月すべて good タイミングで計画して下さったリーダーや安全運転を心がけてくださった運転手の方に感謝です。おかげで心に残る楽しい思い出をいっぱい持ち帰ることができました。ありがとうございました。



■那岐山（岡山県・鳥取県）

＜女性委員会＞

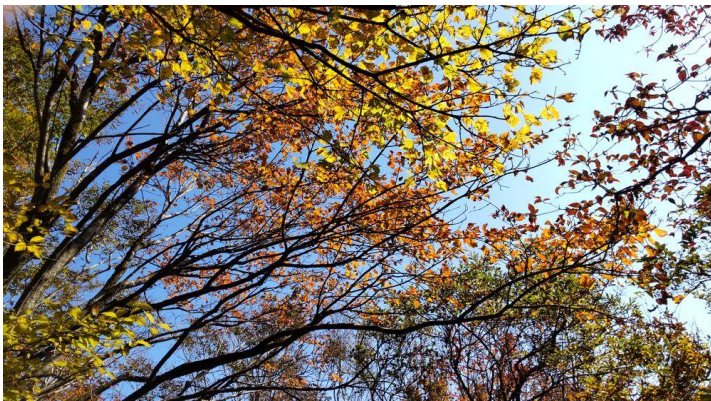
- 日 程：11月2日(木)
- 参加者：L木村 SL春本 一瀬 上田 臼井 岡田(郁) 岡林 田中(重) 田中(由) 松田
- 行動記録：第三駐車場 9:35 発～登山口(9:42 着)～大神岩(10:48 着)11:00 発～那岐の家(11:45 着)12:00 発～那岐山山頂(12:25 着)12:40 発～B コース分岐(12:58 着)～黒滝分岐(13:44 着)14:00 発～登山口(14:50 着)～第三駐車場(14:55 着)

◆快晴の那岐山に登って

岡林重美

那岐山は氷ノ山後山那岐山国定公園を代表する山です。景色が素晴らしいと聞いたので申し込みましたが、夏山集中山行以来なので、不安を抱えながらの参加でした。

朝から素晴らしい天気で、姫路から約2時間、快適なドライブを楽しみ那岐山登山口に一番近い第3駐車場に着きました。ストレッチの後出発、今回はCコースからBコースと周回する経路です。



山々の木々は色づき始め、足元には落ち葉、秋を感じる風景です。登山道はひたすら登りが続きます。あまりに天気が良すぎたせいで早くも汗だくです。夏服で十分、防寒具など無縁です。1時間半程登り続けたあと、「大日如来」「不動明王」と刻まれた大神岩に到着。写真撮影のあと岩に登り眼下の町並みを眺めましたが、残念なことにかすんですっきりとみることは

できませんでした。

まだまだ登りは続きます。1時間後山頂手前の那岐山三角点峰に到着。強風でトイレが吹き飛ばされ、今は修復工事中でした。

見晴らしのいいこの場所で昼食。避難小屋を経て山頂へ。360° 遮るもののない素晴らしい眺めでした。やはりかすんでいて遠くの山々まではっきり見ることはできませんでした。記念撮影のときに不思議なことに気づきました。那岐山は岡山県と鳥取県の境界に位置します。そのためか岡山、鳥取それぞれに山頂の標高を示す石碑が建てられていました。石碑に書かれていた海拔が、鳥取県側は1240米、岡山県側は1255米と15mの差があるのです。「なぜ？」と思



ながら裏側に回ると、鳥取県側には「平成13年国土地理院による調査 標高1240mを1255mに変更」とありました。鳥取県は岡山県より早く建てたためにこんなことになったようです。また那岐山の「那岐」という字も岡山県では「奈義」の字をあてていたそうです。奈義町にある山ですから。このように県によって呼び名が変わる山はたくさんあると上田さんから教えていただきました。山の知識がふえてうれしかったです。

下山です。Cコースは明るい参道を山頂目指して歩きましたが、Bコースは沢沿いを歩きます。山中に差し込む木漏れ日に赤や黄色に色づく木々の葉がキラキラと光ります。心が洗われるような情景の中を下ります。黒沢分岐で小休止、「14時、気持ちが緩みがちな時間帯だから気を引き締めて最後まで下山しよう。」と声がかかりました。「もののけ姫」のような風景の沢沿いの道を歩き、mamigusaを見たりしながら誰もケガ無く下山することができました。下山後は、推定900年の菩提寺のイチョウの生命力に圧倒され、山の駅では黒豆のソフトクリームを食べて大満足の山行でした。

一日中雲一つない天候に恵まれ、お世話してくださったリーダー、どこの道も知っているドライバーの春本さん、ご一緒させていただいた皆様ありがとうございました。

■赤谷山 (1216.4m)

- 日 程：11月3日(金・祝)
- 参加者：L尾内 SL高島 稲見 小田 黒本 笹木 佐野 福原
- 行動記録：戸倉スキー場手前P8:50 発～ゲレンデ上(通信塔)(9:40 着)9:45 発～波佐利山分岐(11:20 着)～赤谷山(昼食)(11:30 着)12:15 発～1143m ピーク(12:35 着)～戸倉峠(13:25 着)13:35 発～旧戸倉トンネル(13:50 着)

◆晴天の赤谷山

稲見真二

10月上旬ごろ赤谷山山行を申し込みましたが、定員オーバーの為断念していたところ、山行2日前に欠員が出来たとの事で、急遽参加させていただきました。

赤谷山は兵庫100山にも入っていて、以前から登ってみたい山でした。晴天に恵まれ気温も暑くもなく寒くもないとても気持ちが良い山行でした。

車2台での山行で下山口（旧トンネル広場）に1台置いてのスタートでした。

8:50 ごろスキー場リフト側より出発、スキーリフトの下をくぐり抜けゲレンデ上（通信塔）までがやや急登でした。その後稜線歩きでアップダウンを繰り返しながらさわやかな風が流れ、ブナ林の中景色は見られないですがとても気持ちの良い道でした。

11:30 ごろ山頂に到着。360度のパノラマの大展望。多分あれが氷ノ山だろうとあれが三室山かなと言いながら昼食。最高の景色でした。

下山は戸倉峠側へ。こちらにもブナ林で景色はほとんど見られませんでした。赤や黄色の紅葉がとても綺麗でした。

帰りは、道の駅 みなみ波賀で休憩。リンゴアイス（宍粟リンゴ園がある様です）を食べ、土産物を買って解散となりました。

女性メンバーの中男が一人で馴染めるか気にしていましたが、気楽に山行を楽しめてとても楽しかったです。尾内リーダーを始め皆様には大変お世話になりました。又の山行を楽しみにしています。

本当に有難うございました。



■雪彦山

<女性委員会>

●日 程：11月9日(木)

●参加者：L安田 SL三木(悦) 上田 白井 黒本 島谷 田羅間 春本 松田 松本(聡)

●行動記録：登山口 8:40 発～展望岩(9:06 着)9:13 発～出雲岩(9:50 着)9:55 発～大天井岳(10:55 着)11:15 発～雪彦山(12:18 着)12:30 発～鉾立山(12:58 着)13:05 発～ジャンクションピーク(13:13 着)～虹ヶ滝(14:22 着)14:32 発～登山口(15:15 着)

◆晩秋の雪彦山に登る

上田利昭

11月9日、メンバー10人、秋色の山里をぬけて麓の駐車場に集合して雪彦山をめざす。最初から岩場の急登が続く、一汗かいて展望岩に着く。登山コースの中で雪彦山（洞ヶ岳）の屹立する岩峰をながめられるのはここだけ、何度見ても素晴らしい岩峰だと思う。

行者堂跡をすぎると最初の難所ともいえる3m程の崖を鎖で下る。斜面に着いた細い道をたどって出雲岩、オーバーハングしたボルトやハーケンがたくさん打ってある岩壁をながめて短い休憩をとる。大きな岩を踏んで進むと次の難所は4m程の崖を登る、大岩に太いくさりもつ

けられているが、そのすぐそばの(*1)ガリーをロープをたよりによじ登る、三点確保になっているのかよくわからない、とにかく必死で通過する。

背割岩を難なく通りぬけた人もいたが私はとても通れそうになく大岩を巻いて通ると次は馬の背、私はここを一番心配していた。足に不安があつてのやせ尾根の通過はほとんど四つん這い状態だったと思う。

山頂直下のクサリ場もなんとかよじ登って、「名峰雪彦山」の標識と祠のある山頂に立つ、なんとか登りきることができた。普通の山なら山頂に立てば目的をはたして胸をなでおろすところだが、私にはこの後の方が厳しいものだった。



祠の前で昼食、写真を撮って915. 2mの三角点のある雪彦山を通り銚立山へ向かう、この雪彦山と銚立山の間はゆるやかな登山道で気持ちやすこし楽にすることができた。

峰山への分岐を分けてジャンクションピークから杉林の中の急傾斜の道をジグザグに下る、杉の木につけられたペンキマークを見て何度か沢を渡りナメ滝を通過して虹ヶ滝まで下ってきた。ここはいつもぬれているし足元の見えにくい岩場の下りなのでイヤな所だが前後のメンバーに助けられて何とか通過、この後もなんども岩場のアップダウンや渡渉があつて緊張が連続した。鉄製の砂防ダムの階段を下れば登山口はもうすぐ、ようやく胸をなでおろすことができた。

とにかく・なんとか・なんとかで山頂に立てたこと、危なっかしいところは何度かあつたが事故を起こさないことだけはできた。

この山行はキャンセルしようかと何度も迷った、雪彦山の険しさはよく知っているし、足の故障もあるので自信がもてなかったのだが、「もう一度登ってみたい」思いがあつて参加した。案の定、いまの体には厳しく緊張を強いられる山行になった。はじめて雪彦山に登ったのは15歳の夏、それから70年たつて「もう険しい山はダメですよ」と云われたように思ったし、それを受け入れなければならない思いもした山行になった。みなさん雪彦山行を無事終了、お疲れさまでした、お世話になりました。



(*1)ガリー (gully) とは、降水による集約した水の流れによって地表面が削られてできた地形のこと。